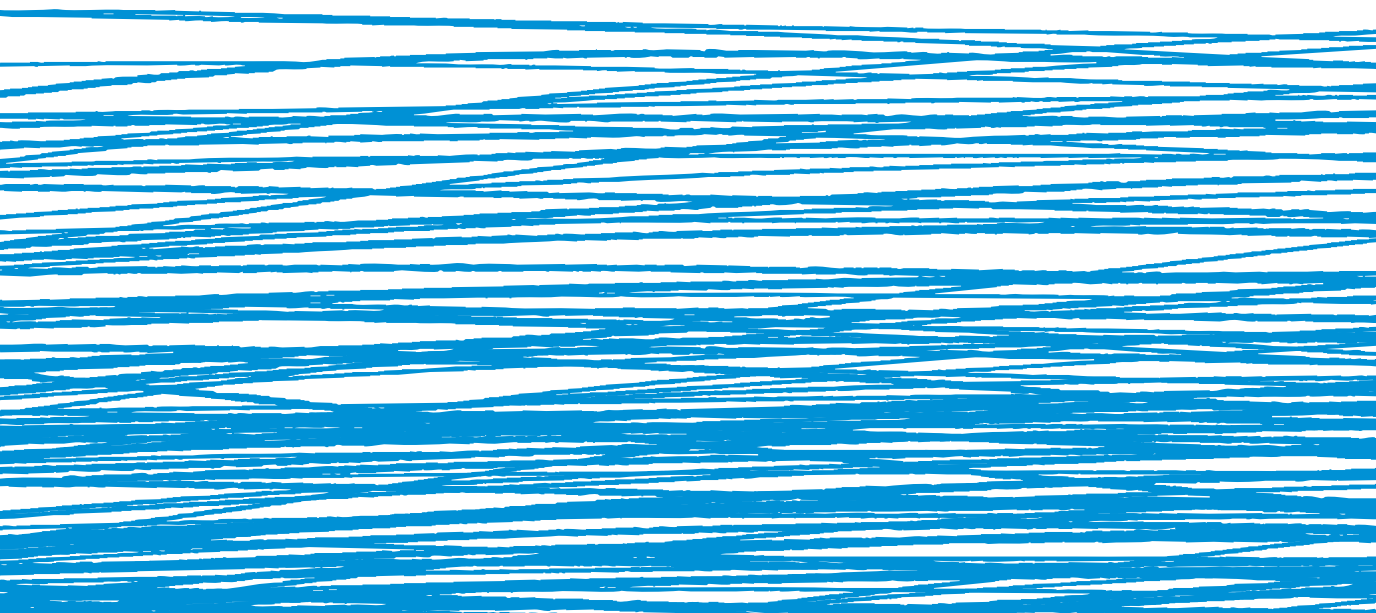


常磐線舞台芸術祭 二〇二三

JOBAN LINE PERFORMING ARTS FESTIVAL 2023

常磐線舞台芸術祭 寄稿集

「つなぐ、」



P.01 柳美里「わたしが手にした糸の端」

P.06 平田オリザ「物語の力を信じて」

P.07 小松理虔「常磐線から、浜通りと、事を共にする」

P.08 古川日出男「On 'voice on voice」

P.09 和合亮一「真夏の常磐線にて、覚醒を共に。」

P.10 相馬行胤「常磐線舞台芸術祭開催にあたって」

P.10 いわき芸術文化交流館アリオス（担当…企画協働課 萩原宏紀）「出会い続ける芸術祭」

P.11 原武史「『線』の思考—鉄道と宗教と天皇と—」

「わたしが手にした糸の端」

二〇一八年一月二日、わたしは平田オリザさんに一通のメールを送りました。

オリザさんとわたしの共催で、福島県の浜通りエリアで舞台芸術祭を実現できないでしょうか、という呼びかけでした。

第一回は二〇二〇年の夏に開催したい、と書きました。その理由は、二つありました。

一つは、原発事故で寸断された浪江駅、双葉駅、大野駅、夜ノ森駅、富岡駅の二〇・八キロがつながり、二〇二〇年春にJR常磐線が全線開通するということ。

もう一つは、二〇二〇年夏に予定されていた東京五輪でした。

わたしは、オリンピックを観戦するために首都圏に集まる多くの人に、常磐線に乗って福島県の浜通りを訪れてもらいたい、と考えたのです。

オリザさんへのメールは、わたしが南相馬市の臨時災害放送局でラジオ番組を担当し、もうじき六百人の地元住民のお話を収録することになるということ、息子が南相馬市内の公立高校に入学し卒業したこと、避難指示が解除されて間もない南相馬市小高区で暮らしながらブックカフェ「フルハウス」を営んでいることなど、二〇一一年三月十一日以降のわたし

の活動をお知らせするところから書きはじめました。

返信のメールは、すぐに届きました。

「まず、演劇祭についてですが、こちらはいかようにでもお手伝いできると思います。もちろん、手伝いだけではなく、中心になって働きます」「福島に関しては私も覚悟を決めている」という平田オリザさんの言葉に接した時、わたしはどんな困難に直面してもそれを克服して、舞台芸術祭を実現しよう、という意志の力を持ったように思います。

でも、実は、その時はまだ、わたしは平田オリザさんときちんとお話ししたことはありませんでした。

一度だけ、道でばったりお遭いしたことがあります。

二〇〇〇年の春のことでした。当時、わたしは渋谷区松濤のマンションで暮らしていました。十五年間連れ添った、劇団「東京キッドブラザース」の主宰者である東由多加を癌で亡くし（東の享年は、現在のわたしと同じ五十四でした）わたしは生後三ヶ月の息子を独りで育てていました。『命』という作品を週刊誌に連載していた頃のことです。

わたしが主宰している「青春五月党」は、一九九五年に草

月ホールで上演した『Green Bench』を最後に休眠状態で、わたしは小説に軸足を移していました。

図らずも、わたしのマンションから徒歩十分の場所に「こまばアゴラ劇場」（平田オリザさんが主宰する「青年団」の拠点劇場）はあり、息子をバギーに乗せて散歩する時は必ずアゴラの前を通りがかっていたのです。息子が大きくなるまで演劇は無理だな、と思いつつ青年団の新作ポスターを憧れの眼差しで眺めていたことを憶えています。

わたしは二十歳の頃から青年団の芝居を観ていました。

平田オリザさんが創り出す世界には、平凡な人間の内にあ
る襞のような起伏が精緻な台詞に忍ばされていて、終演後、
劇場の外へ歩き出すと同時に、現実世界に叙情の静けさが広
がる——、それまでの演劇には無い「目覚め」と名づけても
いいような新しさがありました。

青年団の旗揚げが一九八三年、青春五月党の旗揚げが一九
八七年、新聞や雑誌などで若手の注目劇団として共に特集さ
れることもありました。

一度もお会いしたことはなかったけれど、わたしは平田オリザと青年団のことをよく知っていたのです。

二〇〇〇年の春、三十一歳のわたし、に戻ります。

バギーを押して松濤からアゴラ劇場のある通りへ下りよう
としていた時、坂の下からオリザさんが上ってくるではありませんか——。

擦れ違った瞬間、「平田さん」とお声がけして、わたしはバ

ギーの中の息子を紹介しました。ほんの三十秒ほどの立ち話でした。

二〇一八年四月九日、わたしは「フルハウス」を開店し、計十七回の土曜イベントを開きました。第一回目の四月二十一日は詩人の和合亮一さんの朗読会でした。

和合さんとわたしは同じ一九六八年生まれで、物書きとしてのデビューもほぼ同時期です。

朗読会に、和合さんの中学校の同級生である森崎英五朗さんが参加してくださり、次男の陽くんが「福島県立ふたば未来学園高等学校」の演劇部に所属しているということを知ったのです。

「警戒区域」に指定された双葉郡内の五つの高校は休校を余儀なくされました。双葉郡八町村の強い要請によって、二〇一五年四月八日に開学したのが「ふたば未来学園高等学校」なのです。

森崎さんは五月に陽くんといっしょにフルハウスを再訪し、本を購入してくださいました。

「部活動を見に来てください」と陽くんに誘われて、「うん、行くよ」と約束し、「突然行ったらみんなびっくりするから、顧問の先生の連絡先を教えてください」と、わたしはその場で先生のメールアドレスを教えてもらいました。

五月二十日、わたしは広野町のふたば未来学園高校演劇部の部室を訪ねました。

一年生、二年生、三年生が三つのチームに分かれて、学校生活の一年間をまとめた十分ぐらいのエチュードを発表していききました。いちばん人数の多い二年生は、芝居仕立てではなく、半円になって思い出を語り合おうという方向性だったのですが、右端の森崎陽くんと左端の大田省吾くんの二人だけが一生懸命しゃべり、真ん中に座った女子生徒たちはその会話に全く加わらずに黙っていました。部活終了時に、顧問の小林俊一先生が、「どうして何も話さなかったの？」と質問したところ、女子の一人が「つまらないから」と横目で睨んで呟きました。

俳優としての表現以前の、反感を剥き出しにしてみたり、気取ったポーズをとってみたり、わざとつまらなそうにしてみたりしている思春期の自意識に照らし出された彼らの顔が、わたしにはとても魅力的だったのです。

まさに青春、五月の出会いでした。

彼らとならば、四半世紀のあいだ休眠させている青春五月党を復活できる、と確信しました。

二〇一八年九月、青春五月党は、ふたば未来学園高校演劇部の十六歳から十八歳の十三人の生徒たちと共に、フルハウス裏にあった古倉庫で「静物画」を上演し、復活を果たしたのです。

そして、平田オリザさんは、ふたば未来学園高校に入学から関わり、生徒たちが演劇を創作する過程で身に付ける合意形成能力や表現力で、福島県や双葉郡のことを国内外に発信できるようになってほしいと演劇教育の導入に力を尽くされていきました。

坂の途中での三十秒から十八年を経て、わたしと平田オリザさんは同じ場所に立っていたのです。

二〇一八年、二〇一九年の二年間、わたしは「常磐線舞台芸術祭」を実現させる上で重要だと思われる方々にメールを送り、何人かの方には直接お目にかかり、お話をしました。

今回実行委員に加わってくださっている小松理虔さん、相馬行胤さん、古川日出男さん、和合亮一さんです。

開催自治体の首長や担当部署の方々、開催施設の方々、地元住民の方々、地元メディアの方々、協力企業の方々にもご説明やお願いをして歩きました。

プログラムの内容も、平田オリザさんと話し合って固めていきました。

二〇二〇年三月十四日、JR常磐線は九年ぶりに全線開通しました。

しかし、コロナ、です。

常磐線全線開通の翌月、緊急事態宣言が発出されました。

不要不急の帰省や出張や旅行などの県外への移動に対しては自粛が促され、密閉・密集・密接の「三つの密」がある集まりには中止や延期などの対応が要請されました。

常磐線全線開通のお祝いムードは、瞬時に吹き消されてしまったのです。

雲雀ヶ原祭場地（南相馬市原町区）で行われる相馬野馬追の新旗争奪戦も、新盆を迎えた家を訪ねて御霊を慰めるいわきの「じゃんがら念仏踊」も、福島県内のみならず全国の祭やイベントの中止が次々に発表され、東京オリンピックまでが一年延期されました。

わたしは「常磐線舞台芸術祭」の開催を断念し、関係者に中止を伝えるメールを送りました。

コロナのパンデミックはその後もつづき、波を重ねるごとに感染者数は多くなり、南相馬市内でも閉店に追い込まれる飲食店が増えていきました。

二〇二一年二月十三日、福島県沖を震源とするM七・三（震度六強）の地震が起きました。

フルハウスを含む我が家も「一部損壊」となり、家具、電化製品、食器——、家財という家財がことごとく壊れました。わたしたち家族は軽トラックをレンタルし、自宅と隣町にあるクリーンセンターを何往復もして、家財を廃棄し、借金を

して建物を補修し、様々なものを購入し直しました。

しかし、一年後の二〇二二年三月十六日、同じ震源域でM七・四（震度六強）の地震が起こり、我が家及びフルハウスは再び「一部損壊」となってしまったのです。

全国的な報道量は極めて少ないですが、一年以上が経った現在でも、雨漏りを防ぐために自宅の屋根をブルーシートで覆う応急処置でしっくいのお宅がまだたくさんあります。特に被害の大きかった相馬市では、業者の人手不足が深刻で、半壊以上と判定され公費で解体されると決まった建物一六九棟のうち、解体工事が完了したのは四十三%にあたる五百棟だということです（二〇二三年三月現在）。

東京電力福島第一原子力発電所の廃炉措置に要する時間は四十年と発表されています。これから、燃料デブリの取り出しをはじめとした極めて難易度の高い作業や工事が数多く控えています。

今後も福島県浜通りの住民は、原発処理水の海洋放出、水産物の風評被害の懸念、原発事故の追加賠償の指針、双葉町と大熊町の「中間貯蔵施設」で管理・保管されている除染土壌や放射性廃棄物を三十年以内に福島県外で最終処分するための取り組みなど、立場によって条件や意見の分かれる事柄に直面しつづけるのではないでしょうか。

原発事故以降、様々な線が引かれました。

それは、この地域で暮らす人びとの中に分断や対立や摩擦を、暮らしの中に痛みや苦しみをもたらしています。

南相馬市小高区に暮らす友人は「人と顔を合わせたり話したりするたびに、ささくれ立って、痛い」と語っていました。

線という言葉は、分断や対立に用いられることが多いですが、文字としては糸と泉で成り立っています。

線は、人間の本源が対立ではなく、混じり合うところにあるということを表している、とわたしは思います。

全ての芸術の本質は対話にあります。

文学、音楽、美術、写真、演劇、舞踊、演芸、映画——、その創り手は、自分自身の耳ではない誰かの耳に向かって呼びかけ、自分自身の目ではない誰かの目に向かって訴えかけ、自分自身のものではない誰かの感覚を揺さぶろうとします。

それは、自分の内に他者を招き入れる行為でもあります。

自分と他者の置かれた共通の、あるいは全く異なる状況を理解して、同じ場所と時間の中で生きていかなければならない福島県民にとって、舞台芸術の果たす役割は単なる娯楽以上のもの、孤絶している人にとっては魂の命綱になり得るものだと思います。

「常磐線舞台芸術祭」第一回のテーマは「つなぐ、」です。

まず、つなぐ、という意志を持つ。

つなぐとした指先が届かなかったとしても、つないだ後に再び隔たりが生じてしまったとしても、わたしから出発してあなたへと向かう、その軌跡が糸となり泉となるのではないでしょうか？

常磐線という一本の線のほとりに、いくつもの泉が湧き上がり、その水が広がって一つの美しい湖が誕生する奇跡が起きることを、わたしは祈っています。

「物語の力を信じて」

福島との縁は、二〇〇四年にいわき総合高校に演劇系列が設置され、そのカリキュラム作りのお手伝いをしたことがきっかけでした。そこからほぼ毎年、授業を行い、当初は教員研修も何度かしました。「なんで高校の授業で演劇？」といった時代でした。

福島市にある「こむこむ館」という教育文化施設でも県内の高校演劇の指導が始まり、さらにご縁が深まりました。

そして二〇一一年三月、東日本大震災が起こります。私自身は一ヶ月後の四月二一日に、車で初めていわきに入りました。総合高校は二週間前の余震で校舎の一部が入れなくなっていました。双葉郡から来ている演劇部の生徒の一人は、「これから荷物を家にとりに行きます。テレビとかが盗まれちゃうらしいんで」と語っていました。

一一年、一二年は、ほぼ毎月福島に通いました。福島県からの依頼で南相馬や郡山はもとより、新潟県境に近い奥会津の方まで訪れる機会もありました。

一五年、広野町にふたば未来学園が開学します。いろいろな経緯で、この学校では一年生が毎年、演劇の授業を受けることになりました。震災で厳しい体験をした彼等、彼女らの中には、当初、実際に自分たちが経験したことをなぜフィクションにしなければならぬのか戸惑う生徒も多くいました。フィクションでしか伝えられないこと、それを高校生が表現することの意味を一緒に考える日々でした。

ふたば未来は、最初の四年間は中学校の校舎を借りる形で開学しました。一九年に現在の校舎ができ、その中に劇場も設置されました。「なぜ、高校に劇場を？」というところで財務省などからも反対があったようです。学校や県教委とともに粘り強く交渉を行い、いまの素晴らしい校舎が完成しました。

この間、私自身もロボット演劇『さようなら』、オペラ『海、静かな海』と震災を扱った作品を創ってきました。しかし、私が目撃した福島のさまざまな分断については、まだ作品には出来ていないと感じています。フィクションでしか伝えられないことについて、もう少し私自身も考えていきたいと思っています。

さて、ふたば未来学園の新校舎が完成した二〇一九年、柳美里さんから、二〇二〇年に常磐線沿線で演劇祭をやりたいのだと連絡が来ました。私は即答で「何でも協力する」と答えたことと記憶しています。

しかしそこから三年、コロナで延期の繰り返しを余儀なくされ、やっと常磐線舞台芸術祭が開催されます。物理的にも精神的にもズタズタになってしまった福島浜通りを、物語（フィクション）の力でつなげていくことが出来ればと願っています。

今年は、いわき総合高校のいいみちこ先生が私のもとを訪ねてきてから、ちょうど二十年になります。私と福島との関わりも、また別のフェーズに入っていくのだと感じています。

平田オリザ

「常磐線から、浜通りと、事を共にする」

酒と魚と旅行が好きだ。他所の土地に行く。その土地をめぐる。言葉を支え合う。地酒を飲み、海の魚も川の魚も両方楽しむ。それで万事オールライト。モウマンタイだ。なにより余計なことを考えずに楽しめるのがいい。いや、むしろ余計なことを考えたつていい。そうこうしているうちに、気づくとその土地にどっぷりと浸かっていたり、難敵だと思っていた人との間にか語り合っってしまったたり、その気はなかったのに、ある人とのつぎきない関係になってしまったり。まあつまり罫なのだ。罫に嵌るのをわかっているのに、どうしてもどこかへ行きたくなる、食べなくなる、そして飲みなくなる。困ったもんだなあ。

震災後の浜通りで、ぼくは大いに酒を飲み、魚を食らい、旅をしてきた。自分でも楽しんだが、他所からやってくる人たちとも共に楽しむこともした。そういう企画もしてきた。そうしたら、いつの間にか自分なりの震災の体験を言葉にできるようになっていった。ツアーコースが生まれていて、うまいものにも詳しくなり、そのついでに、本が何冊か書けていた（賞までもらってしまった！）。ぼくの暮らしは以前に増して楽しいものになり、友達が増え、体重も増えて、そしてまた、この八月も、外からやってくる皆さんたちと、震災や原発事故について考える、充実した時を過ごすことができる。

常磐線舞台芸術祭で企画された「ロッキンツアー」と「どんちゃん港」、この二つのプログラムは、上記のようにぼくが勝手に企画したもののである。「お客様のため」ではない。かと言って「自分のため」でもない。一言で言えば「朋遠方より来たるあり、また楽しからずや」というやつだ。この浜通りを旅しよう、学ぼうとするもの皆、朋友である。同じ志を持つものが集い、福島のと酒を飲み、各地を巡ること以上に喜ばしいことはない。そこに被災者も部外者も、当事者も非当事者もない。つまり酒と魚と旅行は、壁を溶かし、事を共にする「共事」の回路を開く。

酒や魚や旅行を入り口に、ぜひそこからさらなる思考の旅に出てほしい。あちこちに関心の旗を立て、その旗をバタバタと風にはためかせながら、この地にさらにどっぷりと浸かってほしい。興味があることができたなら、本を探して読んでもいい。気になる場所を再訪するのもいいし、もう少し長く、この地に滞在していただけたらうれしい。さあ、臆することなく楽しみ、後先考えずに杯を重ねよう。語ったことをみんな忘れて、ほのかな頭痛の奥に、「ああ、いい夜だったなあ」という記憶だけが残る。そうそう、そういうことが復興には欠かせないのだと、ぼくは腹の肉をさすりながら思うのである。

小松 理虔

「On 'voice on voice」

誰だって理解できることを口にすれば、鉄道の駅にはそのひとつひとつにストーリーがある。そういうストーリーは消し去ることはできない、はずだ。だが、俺は駅そのものが消失してしまうという情景をひとつならず目にしてしまっていて、そういうのはどれも、二〇一年の三月十一日の後に体験した。

あの震災から一カ月経過していない春のある日、福島県浜通りの最北端の駅がある新地町に行つて、その海辺に行つて、だが、俺は常磐線のその駅を見なかった。見られなかった。あれは「壊滅していた」と言っているんだと思う。いろいろなところにレールはあった。でも地上から浮いていた。曲がっていた。鉄路は全然つながっていないかった。ばらばらだった。

そして沈黙があった。

そこから何年か経って、富岡町に入った時に、……それは帰宅困難地域というものに「地元の方の一時立ち入りに同行して入る」という形でしか実現しなかったのだけれど、俺は富岡駅を見ることができなかった。その駅舎もやはり津波にやられたんだ、と聞いた。町内に残っている線路は見た。繁茂する草に埋もれていた。俺はそういうのを、線量計を首から下げながら、見た。

そこにも沈黙があった。

でも、いまはどうだろうか。いまは、新地駅はある。富岡駅もある。つまり巨大な津波に破壊された駅舎も、それぞれに新しい形をまとうて、戻ってきた。ということは、新しいストーリーをまとうて、この「現在」に戻ってきている。でも、それだけでいいんだろうか、とも思う。

二〇一一年の三月十一日の前のストーリーに、接続させてやりたい。つまり「過去」に。

それができなかったら、いま、ここにあるストーリーは「未来」には接続しないという予感がしている。じゃあ、どうしたら接続するのか？ 忘れてならないのは、何年もの間、そこには沈黙があったという事実だ。その沈黙を埋める必要があるんじゃないか、と俺は思つて、いいや、俺は「その沈黙にもういちど触れる必要がある」……んじゃないだろうかと思つていて、そうしたら、沈黙は何かをささやき返すと予想している。そこに声を重ねて、そこに声を接触させたら、「過去」のいろんな声にも触れられるんじゃないのか？

俺は、それぞれの駅にあった声について語っている。つまり、それぞれの駅が持っていたストーリーについて、ここで、この瞬間、語っているのだ。

声と声。音と音。重ねて、触れて、オン（o n）にすること。ボイス・オン・ボイスというのは、要するに過去・オン・未来ということだ。そして、もちろん、オン（o n）というのは「音（オン）」なんだ。

古川日出男

「真夏の常磐線にて、覚醒を共に。」

震災の直後の三月はガソリンが手に入らなかった。四月になりようやく入るようになった。子どもの頃から親しんでいた相馬や南相馬の海辺へ車で向かった。浜辺は津波を受けて一変していた。家、船、車、畳、電信柱、靴、サッカーボール、ランドセル：など、あらゆるものが打ち上がっていた。たくさんの方の命が水平線の向こうへと連れ去られていったことを実感した。洪水の後の荒野に立ち、あらためて愕然とした。

数ヶ月が経って、立ち入り禁止区域にも、防護服を着て特別に取材に入らせていただいた。原子力発電所爆発の恐れのお知らせを受けて、避難したままの状態であった。玄関や窓が明け放されていたり、服が干されていたり、電気が点いているままだったり：。小高や浪江の駅は草がボウボウと生えていた。誰もいない商店街。あの静けさの中で、子どものように泣き出した気持ちになったことは、一生、忘れられない。

本年は十三回忌にあたる年である。浜辺はすっかりと整備されて、美しさを取り戻している。あれほどまでに混沌としていた状況を、このように復元した人々の情熱とエネルギーに驚かされる。線路の復旧と共に駅前のそれぞれの街路に人の影が見受けられるようになった。帰還する住民の数はまだまだ少ないけれど、あの〈静けさ〉は少しずつ打ち破られているように感じられる。

十数年の歳月が過ぎて浜通りの地に立って、それでもまだまだ

と心は回帰する。

津波の後の光景を。避難後の風景を。

誰もいない常磐線の駅の姿を。

今も私たちの心の中には、はつきりと震災がある。忘れてなどいない。多くの人は歳月に眠らせているだけなのだ。だからすぐにでも目覚めることが出来る。確信する。投げかけられているメッセージの眼は、心の奥でいつも変わらずに開いているのだ、と。

八月五日には双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で、六日には富岡町の「学びの森」で、八日には福島市の駅の近辺で、十一日には小高町の同慶寺で、それぞれに発信する機会をいただき、あらためて深く感謝したい。合唱、書と音楽のインプロビゼーション、ライブセッション、能楽。あらゆるものに詩人として立ち会わせていただくことに、情熱とエネルギーをまずは自らへと求めていきたい。真夏の常磐線を見つめながら皆と分かち合いたい。覚醒を共に。

和合亮一

「常磐線舞台芸術祭」

開催にあたって

この地域は私たち相馬家のご縁を頂いてから八〇〇年の間には幸せな事だけではなく数々の困難も待ち受けておりました。それら乗り越えてこれたのは先人達が自分達の故郷や文化を残すために弛まぬ努力と知恵を振り絞って下さったからこそです。

またそこから新たな文化や伝統が生まれてきました。今年始まる常磐線舞台芸術祭も後世の皆様がそう振り返ってくださる一つになるであろうと願っております。

相馬 行胤

相馬 行胤 そうま ぎんぎん
NPO 法人 相馬救援隊 CEO

福島県相馬双葉地方をフィールドに、伝統文化の振興、教育、エネルギーの分野に新しいムーブメントを起こすため、引退競走馬を活用した地域創生プロジェクトに取り組んでいます。「被災地」と呼ばれて久しい故郷は、世界の持続可能性をめぐる課題を解決するリソースとアイディアに溢れています。相馬野馬追を代表とする地域の馬事文化を継承しつつ、人々と馬の新しい関係を築き次世代に託す。そして、地域課題の解決を通じ、世界が抱える課題に寄与するモデルを提供してゆきます。

「出会い続ける芸術祭」

二〇二三年四月八日、いわき芸術文化交流館アリオスは開館十五周年を迎えました。そのような節目の年に、実行委員会の一員として、「常磐線舞台芸術祭」に関われますこと、心より嬉しく思います。

当館は、福島県いわき市の公立文化交流施設として、十五年間、芸術文化の力を信じて様々な事業に取り組んできました。今回、この「常磐線舞台芸術祭」をきっかけに、いわきで紡いできた縁を、常磐線を伝ってさらに広げていきたいと思っています。

誰かと誰かが出会うことで、そこに新しい芸術文化が生まれます。その新しい芸術文化が、いつかまたどこかで誰かと誰かを出会わせます。そうやって、人と人、地域と地域、人と地域が出会い続ける舞台芸術祭となることを願っています。

いわき芸術文化交流館アリオス

(担当：企画協働課 萩原宏紀)

いわき芸術文化交流館アリオス

二〇〇八年四月第一次オープン。二〇〇九年五月グラウンドオープン。アルバイン大ホール（一七〇五席）、中劇場（六八七席）、小劇場（二三三席）、いわしん音楽小ホール（二〇〇席）の他、リハール室や練習室等を有する。また、キッズルームをはじめ、誰もがいつでも憩い、くつろげる交流スペースを設けている。愛称であるアリオス“Allos”はArt（芸術）Life（生活）Information（情報）Oasis（憩いの場）Sightseeing（観光）の頭文字から成り立つ。

『「線」の思考—鉄道と宗教と天皇と—』

二つの「常磐」——「ときわ」と「じょうばん」の近現代

二〇一五（平成二十七年）年三月十四日、上野東京ラインの開業とともにJR常磐線が上野から品川まで乗り入れるようになった。それに伴い特急の愛称名も変わり、停車駅の少ない特急が「ひたち」停車駅の多い特急が「ときわ」となった。新たに登場した「ときわ」は、一九八五（昭和六十）年三月まで運転されていた急行の愛称名でもあった。

「ひたち」が現在の茨城県とは異なる旧国名の常陸^{ひたち}に由来しているのは明らかだろう。ただ日立も「ひたち」と読むことを踏まえれば、沿線にある茨城県日立市を指しているようにも見える。平仮名で表記することで、二重の意味が生じているように思えるのだ。

一方の「ときわ」はどうか。『日本鉄道旅行歴史地図帳』3号関東（新潮社、二〇一〇年）では、『ときわ』は常磐と書き、常磐線を象徴する列車名とある。つまり「ときわ」イコール「じょうばん」であり、音読みを訓読みと言い換えただけということになる。

この説明は正しいだろうか。

そもそも「ときわ」と「じょうばん」は同じではない。常陸と、明治元（一八六八）年に陸奥国の分割に伴い設置された磐城^{いわき}という二つの国名の頭文字を組み合わせた「じょうばん」は、明治以降新たにつくられた言葉であるのに対して、「ときわ」を語源とし、常に変わらない岩、ないしは永遠に変わらないさまを意味する「ときわ」（常磐のほかに常盤、常石などとも表記）は、古代にまでさかのぼれる言葉と言えるからだ。

例えば『万葉集』には早くも、「博通法師、紀伊の国に行き、三穂^{みほ}の石室^{いしむ}を見て作る歌三首」の一つとして、「常磐なす石室は今もあり

けれど住みける人を常なかりける」（常に変わらず岩屋は今もあるけれど、ここに住んでいた人は常住不変でありはしなかった）という和歌が収められている（『新潮日本古典集成 萬葉集二』、新潮社、一九七六年）。「ひたち」という愛称名に常陸と日立という二重の意味があるように、「ときわ」という愛称名にも近現代の「じょうばん」に重なる意味のほか、古代以来の「ときわ」に由来するもう一つの意味があると考えるべきだろう。

そう考えると、常磐線という線名に改めて注目せずにはいられない。この線名そのものが、ほかの線にはない奥深さをもっているようではないか。

JR常磐線の下り電車が茨城県の赤塚を過ぎて次の水戸に近づく手前、右手に大学のキャンパスが見えてくる。「常磐大学」という看板から私立の常磐大学だとわかるが、この常磐は「じょうばん」ではなく「ときわ」と読む。

さらに進むと左手に日本三名園の一つである偕楽園^{かいらくえん}が現れ、梅のシーズンにしか乗り降りできない偕楽園駅のホームが眺められる。その駅前には巨大な鳥居がそびえ立ち、常磐神社へと続く参道の石段が延びている。この常磐も「ときわ」と読む。ちなみに偕楽園は明治から昭和初期にかけて常磐公園と改称されたが、この常磐もまた「ときわ」であった。

なぜ常磐線の赤塚から水戸にかけての一带に、「ときわ」ばかりが集まっているのか。偕楽園や常磐神社の所在地が水戸市常磐町となっているように、このあたりの地名は「ときわ」である。常磐神社も常

磐公園も、もともとの地名からとったと考えれば納得がいく。

では一体いつから、「ときわ」という地名が出てくるようになったのか。

常陸国は、播磨国、肥前国、豊後国、出雲国と並び、奈良時代に編纂された風土記が写本として現存している。けれども『常陸国風土記』には、「ときわ」はまだ出てこない。

平安時代に編纂された『倭名類聚抄』の「和名 第六」所収の「常陸国第八十七那珂郡」に記された二十二郷の一つとして、「常石」（ときわ）という地名が初めて出てくる。これが「ときわ」のルーツであろう。鎌倉時代には常石から常磐に表記が変わり、江戸時代には発音は変わらないまま常葉という表記が出てくるが、常磐という表記も残り、常葉村ないし常磐村と呼ばれるようになる。元禄十二（一六九六）年には、水戸黄門として知られる二代水戸藩主の徳川光圀（一六二八～一七〇二）が、東照宮（水戸東照宮）の鎮座する霊松山を常磐山に改称させている。

一八八九（明治二十二年）年、「市制及町村制」の施行に伴い、水戸市に隣接して東茨城郡常磐村が成立した。常磐村は一九三三（昭和八年）に水戸市に編入されたが、常磐自体は水戸市内の町名として残ったわけだ（以上の説明は、『新版角川日本地名大辞典』DVD・ROM、角川学芸出版、二〇一一年による）。

つまり「ときわ」というのは、漢字の表記を変えながらも、平安時代から今日まで千年以上にわたってずっと受け継がれてきた地名と言える。

しかし「ときわ」としての常磐が浮上してくるのは、明治になってからであった。水戸藩の九代藩主、徳川斉昭（一八〇〇～一六〇）は、天保十三（一八四二）年に偕楽園を開いた。そして斉昭が死去して十年あまりが経った一八七三（明治六）年には、徳川光圀と斉昭を祭神とする常磐神社が創建され、翌年には遷座祭を挙行して偕楽園内の一部を境内としたのである。

明治の初期茨城郡常磐村偕楽園に二公の神像を祀れる祠堂あり。廢藩置県の後、旧藩士民等二公の高徳を仰慕して已まず、更に神社に祀り、秩祀の典礼に預からんことを請ふ。朝議之を允し、（明治）六年三月二十七日常磐神社の号を賜ふ。（『常磐神社略誌』、常磐神社社務所、一九二四年）

常磐神社という社号は、「朝議」すなわち朝廷の会議を経て、勅旨をもって与えられたというのだ。一八八二（明治十五年）年には、国家に功績を挙げた忠臣をまつる神社のために創設された別格官幣社に列格している。

ここで一つの疑問が生じる。光圀と斉昭という、水戸藩を代表する藩主であり、水戸学を創始ないし復興させた人物を祭神にするからには、なぜ神社の名称を人物名にふさわしいものにできなかったのかという疑問である。

それはおそらく、常磐の本来の意味である「永遠に変わらない」という意味をもたせたかったからではないか。

斉昭に重んじられた会沢正志斎（一七八二～一八六三）は、水戸学の教典と言わなければならない『新論』のなかで、「天地之嗣、世宸極を御し、終古易らず」と述べている（『日本思想大系水戸学』、岩波書店、一九七三年）。アマテラスの血統を代々受け継ぐ天皇の地位は、永遠に変わらないとしているのだ。つまり常磐神社という名称は、まさに水戸学のイデオロギーにふさわしいと言えるわけである。常磐神社の創建に合わせて、『孟子』梁惠王章句上の「古の人は民と偕に楽しむ。故に能く楽しむなり」（古の賢人は自分ひとりで楽しまないで、人民といっしょに楽しんだからこそ、ほんとうに楽しめたのです）に由来する偕楽園を「常磐公園」に改称したのも、同様の理由によるものではなかったか。

一九二九（昭和四）年十一月二十一日、陸軍特別大演習が行わ

れるのに合わせて水戸市に滞在していた昭和天皇が、歴代天皇で初めて常磐神社を訪れた。祭神が臣下に当たるので参拝はしなかったものの、天皇が水戸学を尊重する姿勢を見せたのは明白だった。天皇は続いて斉昭自身が設計した常磐公園内の好文亭を訪れ、最上階に当たる二階の楽寿楼から「国見」をした（昭和天皇実録「同日条」）。この時期はちょうど天皇の神格化が強まり、治安維持法が改正されて「国体」の変革に対する最高刑が死刑に引き上げられるなど、「永遠に変わらない」という「国体」の観念が高まりつつあった時期に当たっている。

一八八九（明治二十二年）四月に楽寿楼に登った正岡子規（一八六七—一九〇二）は、「がけと沼（千波湖）の間に細き道を取りたるは汽車の通ふ処也。此樓のけしきは山あり、水あり、奥処と曠如を兼ねて天然の絶景と人造の庭園と打ちつゞき常盤木、花さく木のうちまじりて、何一ツかげ（け）たるものなし」（『水戸紀行』、復本一郎編『子規紀行文集』、岩波文庫、二〇一九年所収）と風景を絶賛した。いまでも楽寿楼からは、崖の上にある常磐神社と千波湖の間を縫うようにして走る常磐線の電車が見える。その風景はあたかも、「ときわ」と「じょうばん」という二重の意味をもつ常磐線の姿を象徴しているかのようだ。

常磐線という名称は、一八九二（明治二十五年）年六月二十一日公布の鉄道敷設法の第二条に規定された「予定鉄道線路（の一つとして、『総武線及常磐線』があげられたのが初出と見られる）。

ここでは、「茨城県下水戸ヨリ福島県下平ヲ経テ宮城県下岩沼ニ至ル鉄道」を常磐線とし、国が建設すべき線と規定していた。平は現在のいわきである。鉄道敷設法が掲載された『官報』第二千六百九十三号にはルビが振られていないものの、総武線と併記されていることから見ても、常磐線ははじめから「じょうばんせん」と音読みで読むことが想定されていたと考えられる。

ところが、常磐線は官設ではなく、私鉄の日本鉄道により建設が

進められた。例えば一八九六（明治二十九年）年六月十三日付の『東京朝日新聞』には、次のような記事が見られる。

●土浦線及常磐線 日本鉄道の土浦線即ち田端友部間ハ来る九月下旬又常磐線中水戸平間ハ来る十月下旬若くハ十一月上旬に開業の筈なりと

また同年十二月二日付の『読売新聞』にも、次のような記事が見られる。

○日本鉄道常磐線の工事 日本鉄道会社の新線路なる常磐線中府下田端停車場と土浦間ハ来る十五日を以て開業する筈にて又水戸より平沼ハ明年三四月頃開業の運びなるよし

正確に言えば、日本鉄道の田端—土浦間の開通は一八九六年十二月二十五日、水戸—平間の開通は一八九七年二月二十五日であったから、どちらの新聞も誤った報道をしていたことになる。しかしここでは、どちらにも出てくる常磐線という三字熟語に注目したい。

当時の新聞には、すべての漢字にルビが振られていた。常磐線のルビを見ると、『東京朝日新聞』は「ときはせん」、『読売新聞』は「じやうばんせん」となっている。もちろん正しいのは『読売新聞』のはうだが、当時はまだ「じょうばん」という読み方が一般的でなく、常磐といえは「ときわ」と読むのが普通であった。『東京朝日新聞』は、その常識にとらわれてしまったのだろう。

実は鉄道敷設法や新聞の報道に反して、このときはまだ常磐線という名称が正式な線名ではなかった。現在の常磐線とは異なる日本鉄道の田端—岩沼間が全通したのは、一八九八（明治三十二年）年八月であった。このうち田端—南千住間は隅田川線、南千住—友部間は土浦線、水戸鉄道として最も早く開通した友部—水戸間は水戸線、

水戸—岩沼間は磐城線と呼ばれていた。一九〇一（明治三十四）年の株主総会では、これらの区間を統合して日本鉄道海岸線と称することが議決された。それが常磐線に改称されたのは、鉄道国有法により買収され、国有鉄道になった後の一九〇九（明治四十二年）十月十二日であり、かなり遅かった。

常磐線の主な役割は、旅客輸送よりも貨物輸送であった。一つは日立鉾山の銅、もう一つは常磐炭田の石炭。どちらも茨城県から福島県にかけての沿線に位置し、常磐線が開通する明治以降、本格的に開発された。常磐線の駅からは、さらに鉾山や炭鉾へと多くの支線が建設された。政治的なイデオロギーと結びつきやすい「ときわ」とは対照的に、「じょうばん」は明治以降の資本主義の発展という、経済につながる響きをもつて立ち現れたのである。

『線』の思考 鉄道と宗教と天皇と』（新潮文庫刊）第二章「一つの「常盤」——「ときわ」と「じょうばん」の近現代」より一部を抜粋

原武史

原武史

一九六二（昭和三十七）年、東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。国立国会図書館、日本経済新聞社勤務を経て、東京大学大学院博士課程中退。二〇二三年四月現在、放送大学教授、明治学院大学名誉教授。専攻は日本政治思想史。著書「昭和天皇」（司馬遼太郎賞受賞）「滝山コミュニティ一九七四」（講談社ノンフィクション賞受賞）「民都」大阪対「帝都」東京（「サントリ」学芸賞受賞）「大正天皇」（毎日出版文化賞受賞）「鉄道ひとつばなし」「皇居前広場」（「出雲」という思想）「可視化された帝国」「皇后考」「昭和天皇実録」を読む」「地形の思想史」「線」の思考」など多数。

